

変化の見落としにおけるプライミング効果

金沢大学理工学域電子情報学類情報システムコース 3年 218番 加藤 光

指導教員 : 大岸 通孝

1. はじめに

変化の見落としは、シーン認知における人間の注意機構を調べる目的で研究されてきている。また視覚探索において、最初に探索画面にかんする情報を与えるか否かにより、視覚探索における眼球運動のパターンに違いがみられることが報告されている。

今回の研究の目的は、これらの研究の背景から、変化の見落としにおいて最初に変化部分に関する情報を与えるか否かによる、眼球運動の停留時間のパターンの違いについて調査することである。

2. 実験内容

ヒントありの被験者と、ヒントなしの被験者ともに同じ変化の見落としの動画をみせ、眼球運動を測定した。ヒントありの被験者には、動画が始まる直前に画面上にヒントが提示されるようにした。被験者はヒントあり、なし各3人である。

3. 実験結果

ヒント×停留時間頻度の交互作用に有意傾向がみられた ($F[4, 16] = 2.726, p = .0664$)。これは、事前情報（ヒント）を提示された被験者と提示されなかった被験者では眼球の停留する時間頻度は異なることを表している。図1から、ヒントありの方が、停留時間の短い頻度の割合が小さい

という結果が得られた。

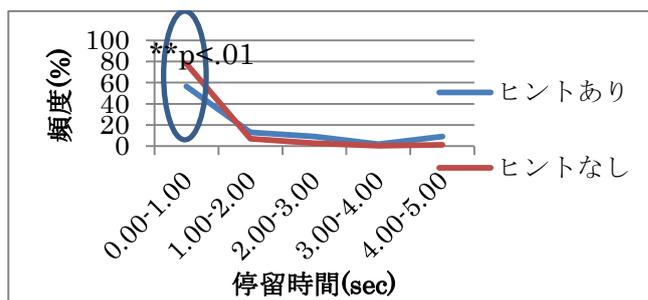


図1：事前情報(ヒント)の有無における停留時間頻度の違い

また、刺激×停留時間頻度の交互作用が有意であった ($F[32, 128] = 2.442, p < .001$)。これは、刺激ごとに眼球の停留する時間頻度は異なることを表している。

4. 考察

ヒントの有無によって、停留時間頻度に違いが見られたのは、プライミング効果により、無意識的に答えを予測して動画を見るので、停留時間の長い範囲の割合が大きくなったと考えられる。逆に、事前にヒントがない場合は、答えが予測できず、答えの範囲が絞れないので、眼球の停留時間の短い範囲の割合が高くなったと考えられる。

5. まとめ

さらに多くの被験者で実験を行えば、今回よりもはっきりとした有意差が見られるのではないかと考えられる。